

「首都圏の言語に関する研究文献目録」からみる研究動向

三樹 陽介

(国立国語研究所)

1. はじめに

本稿では「首都圏の言語に関する文献目録」を用いた研究動向分析を試みる。

「首都圏の言語に関する文献目録」は、国立国語研究所萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」の一環として作成されたものである。首都圏の言語においては、これまで、近代語研究、方言研究、都市言語研究、言語動態研究等、様々な分野からのアプローチによって研究が蓄積されてきた。この文献目録は、このような蓄積の上に立って今後の研究の展望を得るために、研究資産再構築の一つの手段として作成されたものである。

なお、この目録では「首都圏」を、東京を中心とする都市圏、具体的には東京（島嶼部を除く）・神奈川・千葉・埼玉の1都3県として、作業を行った。

2. 文献目録の作成方針

まず、既存の文献データベースを、「首都圏」「東京語」「新語」等関連するキーワードで検索し、論文・書籍の情報を取得した。主たる基盤データベースは以下の通りである。

- ①「日本語研究・日本語教育文献データベース」(国立国語研究所)

<http://www.ninjal.ac.jp/database/bunken/> (2012年11月23日検索)

- ②『20世紀方言研究の軌跡』(日本方言研究会編 2005 国書刊行会)

- ③「国立国語研究所蔵書目録データベース」(国立国語研究所)

<http://libgw.ninjal.ac.jp/mylimedio/search/search-input.do>

(2012年11月23日検索)

- ④「日本方言研究会方言書目」(日本方言研究会)

<http://dialectology-jp.org/wiki.cgi?page=%A5%C7%A1%BC%A5%BF%A5%D9%A1%BC%A5%B9%2F%CA%FD%B8%C0%B4%D8%B7%B8%BD%F1%CC%DC>

(2012年12月13日検索)

その後、①②④については、データベース全体を見直し、また、関係書籍の引用文献、学会発表予稿集等から、関連論文・書籍を追加した。文献の収集にあたっては、「首都圏という地域の言語を対象として意識している研究」について、「地名・動植物名研究等の周辺分野を含め、関連すると考えられるものをある程度広く、網羅的に収集する」という方針を採った。

このようにして収集したタイトルは、1775年から2012年6月までに刊行された論文約1,500件、書籍約400件(2013年1月15日現在)である。このうち、本稿では「論文」のみを分析対象とした。

本文献目録には、「文献名」「著者」「所収誌」「巻号」「発行所」「発行年」「掲載ページ」等

の情報が含まれている。そのほかに「地域」「分野」「方法」「言語分野」など、内容に関する分類を行い、タグを付けている。これらは今後の公開に向けて、現在整備中である。

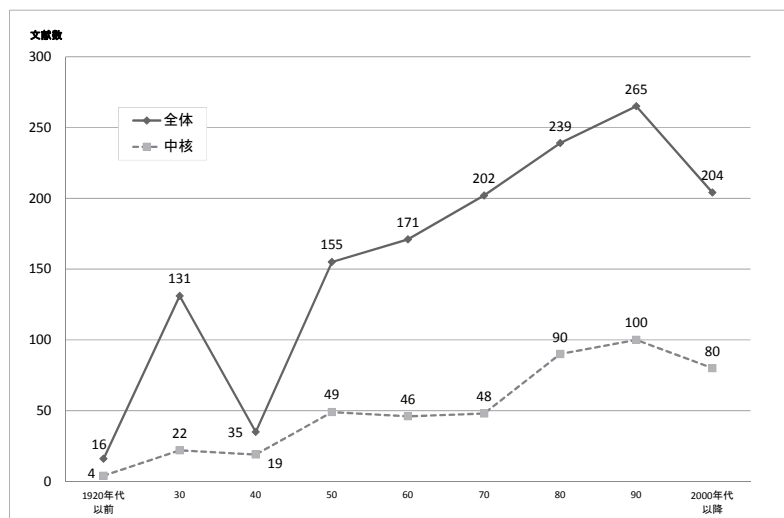
3. 文献目録「論文編」の概要

3-1. 全体像

まず、採録件数についてみていく。グラフ1は論文採録件数を年代別に示したものである。上側の実線が全体の採録件数である。1880年代後半から採録がある（岡村増太郎1886「安房国方言歌」『人類学会誌』、等）が、採録された文献の内容についてみてみると1920年代までは方言集がほとんどであり、また、採録件数自体も少ない。30年代に入ると採録論文数は急増し、戦中・戦後期にあたる40年代で一時急落するものの、その後は徐々に採録件数が増えている。採録論文数は1990年代に頂点を迎えるが、2000年代に入ると減少に転じる。

下側の点線は「中核文献」として精選したものの採録件数である。先にも述べたように、本文献目録では周辺分野も含め、関連すると考えられるものをある程度広く採録しているが、中核文献はそうした周辺分野のもの等を取り除き、約500件を精選したものである。

グラフ1. 年代別、採録件数



本稿では詳しく述べないが、参考までにその採録件数をグラフに示した。多少の上下動はあるものの、やはり1990年代を頂点とするように、徐々に緩やかに採録件数が増えており、また2000年代に入ると採録件数は減っている。なお、40年代では全体の論文数は著しく減少しているが、中核文献の数は30年代とほぼ同数である。

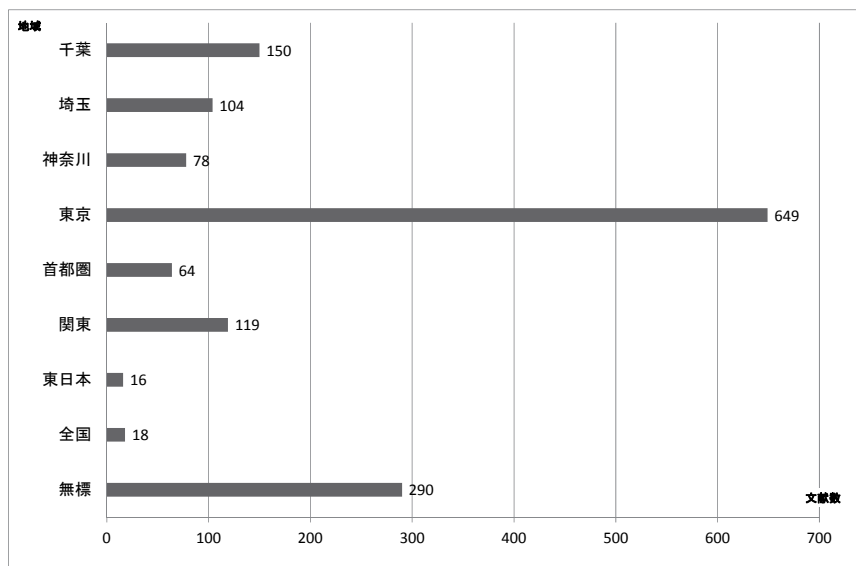
3-2. 地域別件数

次に地域ごとの文献件数についてみていく。グラフ2は地域ごとの文献採録件数についてまとめたものである。分析にあたり、採録した文献を地域別に分類した。文献によって、地域を限定したものと、複数の都県や広域を同一の対象地域として扱っているものがあることから、東京・千葉・埼玉・神奈川・首都圏・関東・東日本・全国の8つに分類した。

また、具体的な地域を特定できないものや、8つの分類以外の地域を加えた複数の地域にわたるものもある。前者の大部分は特定の地域を想定しない現代日本語研究にあたるもので、スタンダードな日本語という観点から、標準語・共通語・現代日本語、等として捉え論じら

れている（花田康紀 1999「現代日本語の音声をめぐる--1999年における標準的な日本語のばあい」『国士館大学教養論集』24-02、等）。ここで論じられていることばは事実上東京を中心とする首都圏のことばであり、その実態・動態の研究となっていることから採録した。これらの文献については地域を特定することは難しいため、「無標」として処理した。また、後者については複数領域にまたがるものとして整理した。そのため合計数は実際の採録件数とは合致しないものとなっている。

グラフ2. 地域別、文献採録件数



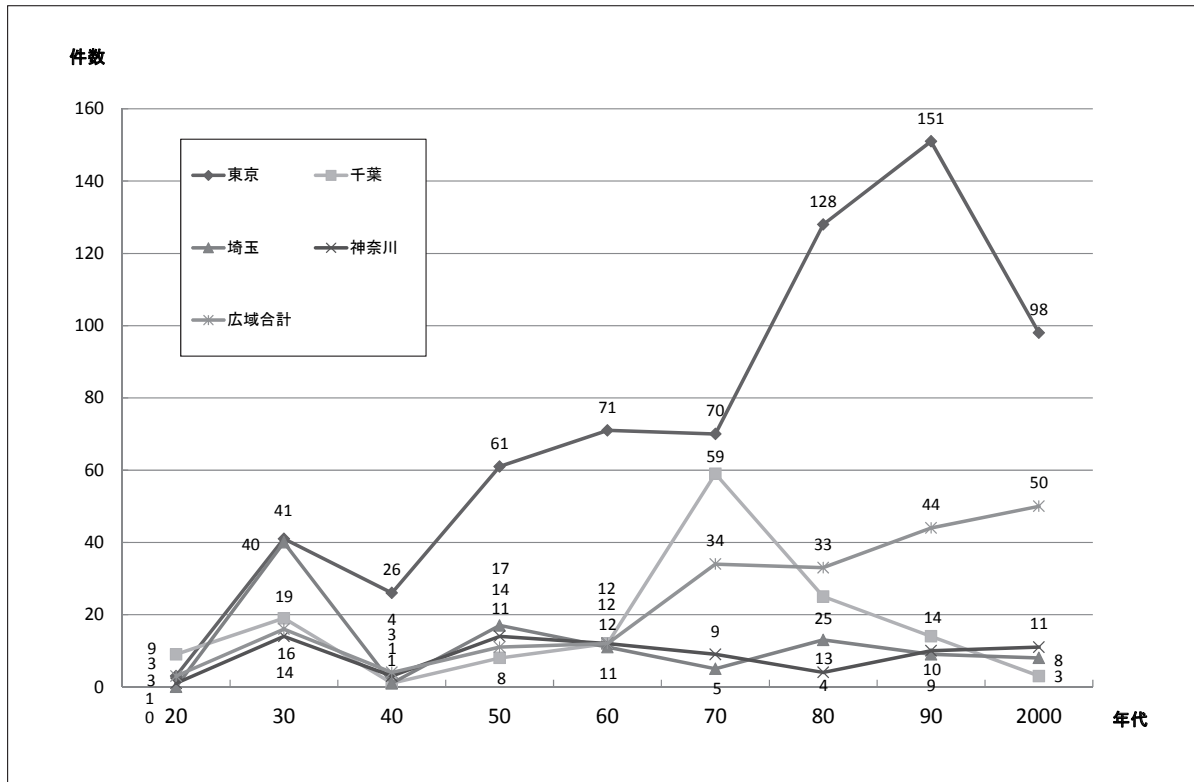
地域別採録文献数では、東京について扱った文献が最も多く、無標、千葉、関東、埼玉、神奈川、首都圏、全国、東日本の順となっている（グラフ2）。都県別にみると、東京を対象とした文献の採録件数が圧倒的に多く、それに比較して神奈川・埼玉・千葉の地域言語研究の採録件数

は少ない。この3県の中では千葉を対象とした文献がやや多いが、これには70年代に多くの調査がなされたことが影響していると考えられる。広域では、東日本と全国とが極端に少ない。これは「首都圏という地域の言語を対象として意識している研究」について収集するという本文献目録の性格によるものだが、「周辺分野を含め、関連すると考えられるものをある程度広く収集する」という方針から、この地域の言語研究のために有益であるものとして採録している文献がここに含まれている。

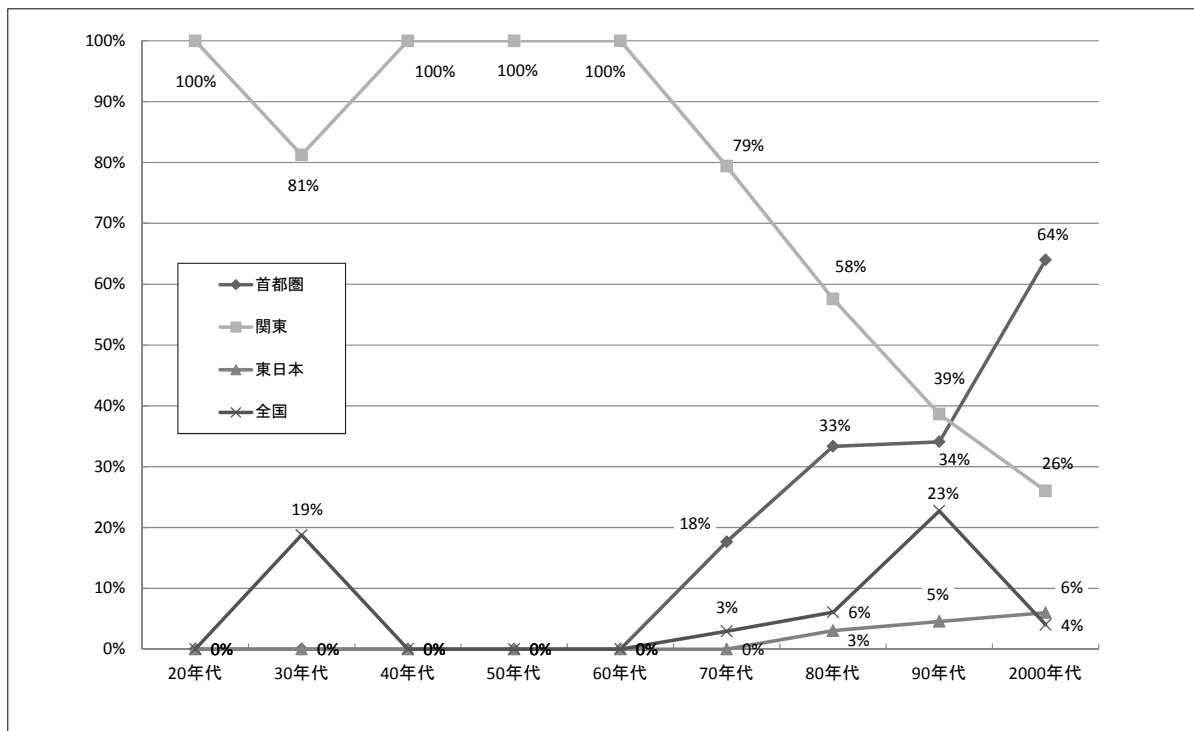
3-3. 地域・年代別、文献数

グラフ3は、東京・千葉・埼玉・神奈川の各都県単独と、複数の都県にまたがる広域を対象とした文献について、それぞれ年代別の採録件数を示したものである。やはりここでも東京の採録件数が突出しているのが目立つ。80・90年代に入ると採録件数の飛躍的な増加がみられ、90年代にピークを迎えているが、しかし2000年代に入ると大幅な減少に転じる。他の地域は押し並べて採録件数は多くはないが、30年代では埼玉の研究が多いこと、70年代では千葉の研究が多いことが特徴的である。

グラフ3. 地域ごとの年代別文献数



グラフ4. 広域地域別、採録件数比率



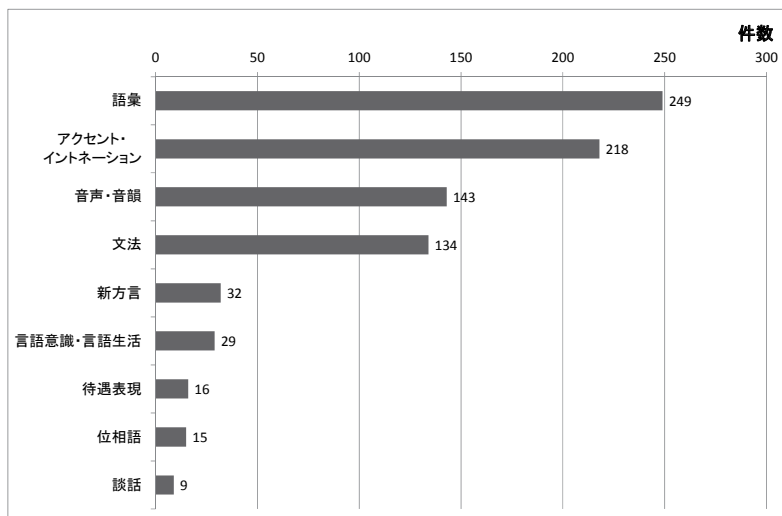
また、70年代頃から単一県を対象とした研究に比べ、広域を対象として扱った研究が増えている。グラフ4は広域地域ごとの採録件数の比率を年代別に示したものである。広域地域を扱った研究では、70年代まで、関東をひとくくりにした研究が主だった。40～60年代の採録件数比率は100%である。しかし、70年代を境に関東を扱った研究が減少していき、一方で首都圏を意識した研究がみられるようになる（野村雅昭 1970「現代東京語の展望」『言語生活』225 筑摩書房 等）。

これは、それまでの単一都県や関東といった地域ではなく、首都圏という地域が意識され、注目されてきたということである。「中央としての東京」から連続する「首都圏」という地域が意識され、注目されてきていることの表れといえる。

広域の内訳をみると、関東地域を言語地理学的に扱った研究と、東京を中心とする都市圏の言語を意識した研究が増えている。首都圏の言語を意識した研究は2000年代に入ってから急増しており、一方で単一都県のような狭域を扱った地域言語研究は2000年代からは減少している。広域を対象とした研究が徐々に数を伸ばしていることがわかる。

3-4. 言語分野別、文献採録比率

グラフ5. 首都圏を対象とした研究の分野内訳

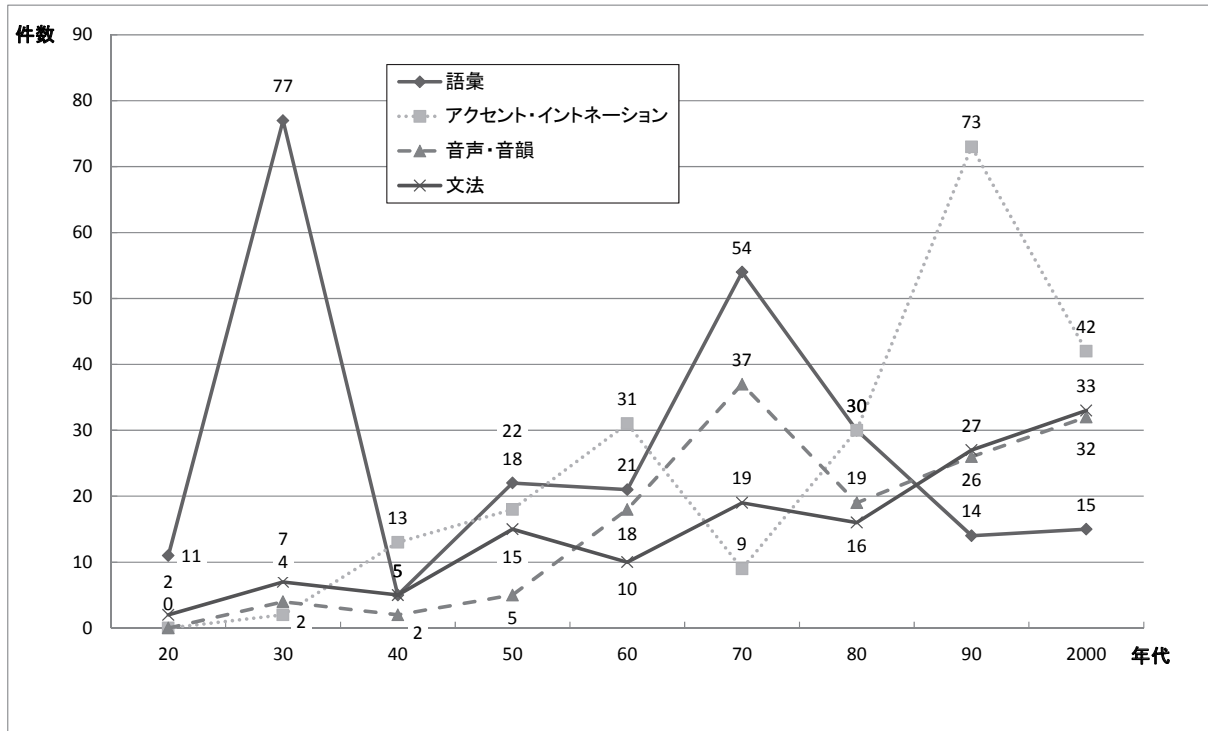


グラフ5は言語分野別採録件数を示したものである。言語分野は多岐にわたることから、グラフ5では代表的な9項目をあげた。複数の分野を含むものは、複数領域にまたがるものとして各箇所にそれぞれ分類し、処理した。このほかにも分類が難しいものもあり、「その他」として分類した（煩雑さを避けるため、グラフ5には示さなかった）。

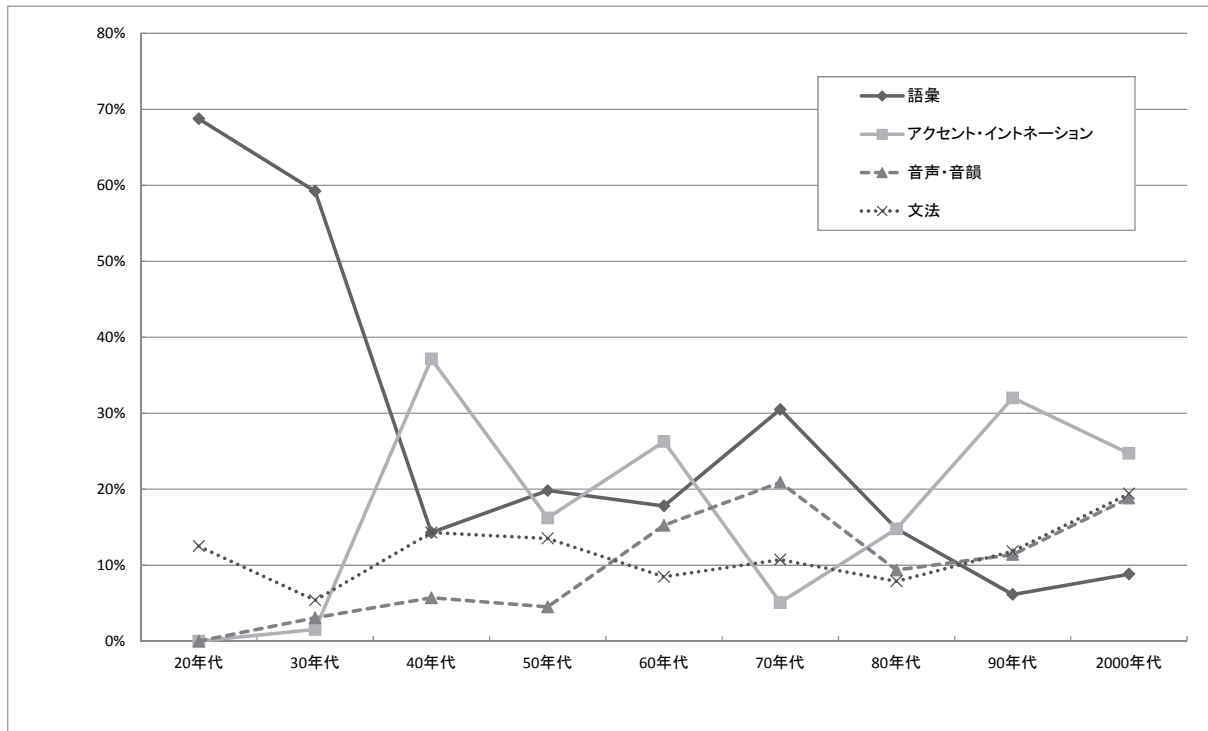
今後さらに整備していく予定である。言語分野別採録件数では、「語彙」「アクセント・イントネーション」「音声・音韻」「文法」の4項目の採録件数が特に多いことが目立つ。

グラフ6は、これらの主要な4項目について年代別に分類したものである。研究黎明期の30年代では語彙の研究が多いが、これは方言集が多いためである。また70年代でも語彙研究が多いが、これは千葉での方言研究が盛んだったことが影響している。さらに80年代以降は音声・アクセント研究が盛んとなってきており、広域、特に首都圏を対象とした研究が増加していることとの関連性がうかがえる。

グラフ6. 年代別言語分野内訳



グラフ7. 主要言語分野別採録比率



グラフ7は主要研究分野について、年代ごとに採録比率を示したものである。

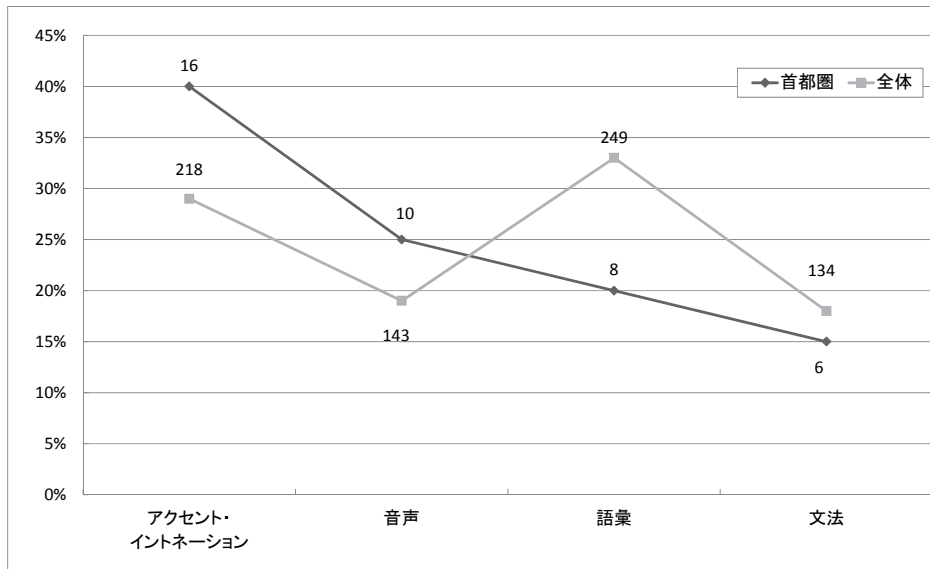
30・70年代に語彙研究が多く、70年代に音声・音韻研究が多い。これをグラフ3と合わせて比べてみると、30年代に埼玉の語彙研究が多かったこと（杉山正世 1933「螻蛄と蜥蜴との称呼（埼玉県）」『郷土研究むさしの』11 武蔵野郷土会 等）、70年代に千葉県の方言研究が盛んだったこと（藤原文夫・谷萩かほる 1975「房総半島（中・南部）のヒキガエル方言」『資料の広場』7 中央図書館 等）、とリンクする。

また、90年代以降はアクセント・イントネーション研究の比率が高くなっている。なお、40年代でもアクセント・イントネーション研究の比率が高くなっているが、採録文献の絶対数が少ないため、グラフ7からは、特にアクセント・イントネーション研究が盛んだったとは判断するのは難しい。参考にとどめる。

「首都圏」あるいは「首都圏方言」という術語が他の言語分野に比べて多く用いられるのもアクセント・イントネーション分野の特徴である（嶺田明美 2006「首都圏出身在住の若年層女性の母音調音の実態について」『昭和女子大学大学院日本文学紀要』17 昭和女子大学、田中ゆかり 2003「首都圏方言における形容詞活用形のアクセントの複雑さが意味するもの 「気づき」 「変わりやすさ」の観点から」『語文』106 日本大学国文学会、等）。これは首都圏を対象とした研究の増加とリンクしていると考えられる。

グラフ8は首都圏を対象とした研究と、文献目録全体での各言語分野の採録比率を分類し、示したものである。首都圏を対象とした研究では、音声・音韻、アクセント・イントネーションといった音声分野での研究の比率が、語彙・文法などに比べて高い。

グラフ8. 言語分野別採録比率（首都圏と全体）



一方で語彙や文法などに関する文献は多くなく、それらは単一都県や関東地域等を扱ったものにより多くみられる。その他には新方言、談話分析のほか、都市言語研究の問題点等について扱ったものなどがある。

4. まとめと今後の展望

以上、本文献目録の概要を研究動向に着目してみた。「首都圏の言語に関する文献目録」を用いて研究動向分析を行い、主に、以下の①～④の点について論じた。

- ① 文献採録数は90年代を頂点に基本的には右肩上がり。2000年代で減少する。
- ② 単一県を対象とした研究は多くなく、70年代以降、広域を対象とした研究が増加。
- ③ 広域を対象とした研究は70年代までは関東地方を一括りにしたものが主だったが、70年代以降、首都圏を意識した研究がみられるようになる。言語体系として一体感を持つ「首都圏」という地域が意識され、注目されてきていることの表れといえる。
- ④ 言語分野別にみると語彙研究が多いが、首都圏を意識した研究ではアクセント・イントネーション研究、音声研究が多い。

③のように、近年の研究動向として、広域を対象とした研究が増えてきている。これまでも東京のことばを対象とした研究は多かったが、その範囲を東京以外へも広めている結果である。一方で千葉・埼玉・神奈川などの地域方言を単独で扱った研究は多くない。

このように、本文献目録を俯瞰することで、対象地域の変化、着目される言語そのものの側面の変化、首都圏の社会状況の変化が研究に与える影響等、首都圏の言語に関する研究の流れと広がりとがみえてくる。このことは、首都圏の言語がその性質に応じた独自の研究方法を必要としていることを示唆するものと考えられる。

今後は、タグの整備とともに方法論からの分析を行う予定である

参考文献

- 井上史雄（2008）『社会方言学論考』明治書院
田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』笠間書院
日本方言研究会編（2005）『20世紀方言研究の軌跡』図書刊行会

文献目録参考画像

以下は本文献目録の画像である。地域タグで「首都圏」がついたものの一部を示した。

番号	編著者	論文名	誌名/書名	巻号	発行所	発行年月	ページ
0344	秋永一枝	東京弁アクセントから首都圏アクセントへ	言語学林 1995-1996		三省堂	1996年04月	pp.663-680
0345	吉岡泰夫	<新刊・寸感>馬瀬良雄・中東靖恵・小西優香編 「首都圏女子大生のキャンパスことば 横浜・フェリス女学院大学」	日本語学	17-10	明治書院	1998年09月	pp.98-100
0346	加藤大鶴	首都圏における外来語平板アクセントと馴染み度	早稲田日本語研究	7	早稲田大学	1999年03月	pp.49-60
0347	伊藤雅光	<新刊・寸感>馬瀬良雄・中東靖恵・小西優香編 「首都圏女子大生のキャンパスことば—横浜・フェリス女学院大学1998」	日本語学	18-04	明治書院	1999年04月	pp.80-82
0348	早野慎吾	首都圏の新方言形チツタ	名古屋・方言研究会会報	16	名古屋・方言研究会	1999年05月	pp.45-53
0349	田中ゆかり	アクセント型の獲得と消失における「意識型」と「実現型」首都圏西部域若年層における外来語アクセント平板化現象から	国語学	51-03	国語学会	2000年12月	pp.16-32
0350	橋元良明・小松亜紀子・栗原正輝・班目幸司・アヌラグ・カンヤブ	首都圏若年層のコミュニケーション行動 インターネット、形態メール利用を中心に	東京大学社会情報研究所調査研究紀要	16	東京大学社会情報研究所	2001年10月	pp.94-210
0351	佐々木英樹	東京湾岸言語地図 3千葉県千葉市・市原市・袖ヶ浦町[1989-92] 4東京都・千葉県境界地帯南部[1992-94] 5東京都・神奈川県境界地帯東部[1994-97]第1分冊	駒沢女子大学研究紀要	8	駒沢女子大学	2001年12月	pp.77-102
0352	早川文代・馬場康維	流行語としての“まったり”の客観化 首都圏におけるアンケート調査	日本家政学会誌	53-05	日本家政学会	2002年05月	pp.437-446
0353	佐々木英樹	<かまきり>と<とくかげ>の混乱と適応 東京湾岸言語地図から	駒沢女子大学研究紀要	9	駒沢女子大学	2002年12月	pp.79-115
0354	田中ゆかり	首都圏方言における形容詞活用形のアクセントの複雑さが意味するもの「気つき」「変わりやすさ」の観点から	語文	106	日本大学国文学会	2003年06月	pp.119-95
0355	吉岡泰夫	コミュニケーション意識と敬語行動にみるボライトネスの地域差・世代差 首都圏と大阪のネイティブ話者比較	社会言語科学	07-01	社会言語科学会	2004年09月	pp.92-104
0356	友定賢治・陣内正敬	関西方言、関西的コミュニケーションの広がりか意味するもの—全国6都市調査から—	社会言語科学	7-1	社会言語科学会	2004年09月	pp.84-94
0357	田中 ゆかり	東京首都圏における関西方言の受容パターン「間接接触」によるアクセサリイ的受容	関西方言の広がりどコミュニケーションの行方 研究叢書339		和泉書院	2005年12月	pp.159-178
0358	嶺田明美	首都圏出身在住の若年層女性の母音調音の実態について	昭和女子大学大学院日本文学紀要	17	昭和女子大学	2006年03月	pp.1-7
0359	田中ゆかり	特集、日本語の謎——方言「東京首都圏」に「方言」はあるのか	国文学 解釈と教材の研究	51-04	学燈社	2006年04月	pp.60-62
0360	川上 葵	<研究ノート>最近の首都圏語のアクセント変化	音声研究	10-02	日本音声学会	2006年08月	pp.72-76
0361	田中ゆかり	「とびはね音調」の探査とイメージ 東京首都圏西部域高校生調査から	語文	126	日本大学国文学会	2006年12月	pp.66-54
0362	斎藤孝滋	談話構造分析の計量的視点による一試案 首都圏大学生話者の場面別談話を対象として	多文化・共生コミュニケーション論叢	2	フェリス女学院大学多文化・共生コミュニケーション学会	2007年02月	pp.23-33
0363	斎藤孝滋 編	首都圏在住女子大学生における場面別形容詞活用体系! 東日本話者編!	多文化・共生コミュニケーション論叢	2	フェリス女学院大学多文化・共生コミュニケーション学会	2007年02月	pp.35-81
0364	荻野綱男	<ノート>最近の東京近辺の学生の自称詞の傾向	計量国語学	25-08	計量国語学会	2007年03月	pp.371-374
0365	山岸智子	持続時間の長い撥音に関する知覚と経験の関連性 近畿方言話者と首都圏方言話者	言語文化と日本語教育	33	お茶の水女子大学日本語文化学会	2007年06月	pp.31-35

付 記

本稿は、日本語学会 2013 年度春季大会（2013 年 6 月 1・2 日）でのブース発表（三樹陽介・三井はるみ「首都圏の言語に関する研究文献目録」紹介）を改稿したものである。なお、「首都圏の言語に関する研究文献目録」は Web 版で公開中である。

プロジェクト URL <http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/>